１－４

主題	留学生の「コミュニケーションができるようにする」ために
副題	地域の人たちとの交流からこころを通わせて学ぶ

キーワード１	留学生	キーワード２	コミュニケーション	研究(実践)期間	12 ヶ月

法人名・事業所名	武蔵野大学別科(介護福祉士養成課程)
発表者（職種）	ベティト ジョンレイ ワメルダ(学生)、ダウグダウグ メリーアン パブレオ(学生)
共同研究(実践)者	小野内智子（教員)、松本真一（教員)、岡寿子（教員）

電　話	０４２－４６８－３１１９	ＦＡＸ	０４２－４６４－１５０５

事業所紹介	武蔵野大学別科(介護福祉士養成課程)は、東京都西東京市内にキャンパスがある。２年制で、留学生、フィリピン人の学生が多く学んでいる。私たちは、介護福祉士を目指している。

《１．研究(実践)前の状況と課題》

私たち留学生は、日本語学校で日本語を学び、武蔵野大学別科に入学している。学生の中には、母国で医療の仕事をしていた者やすでに介護施設でのアルバイトをしている者がいるが、多くは入学後に、初めて日本の介護施設のことを知る。私たちが一番大変だったのは、日本語でのコミュニケーションである。クラスメイトには日本人がいないので、どうしても母国語で話してしまう。

異文化の中で初めての介護の勉強に取り組み、実習やアルバイトで、「コミュニケーションをとっていてください」と言われるのが、一番つらい。利用者の話す言葉、とくに昔の言葉がわからない。また、丁寧に話さなければと思うと、なかなか言葉が出てこない。「そうですね。」「はい」で済ましていた。

《２．研究(実践)の目的ならびに仮説》

高齢者が使う日本語を多く知れば、コミュニケーションがとれるのではないか、そのために日本人ともっとコミュニケーションができる機会が増えたら、上手になるのではないかと考えた。

《３．具体的な取り組みの内容》

授業で、地域の高齢者の方々との交流ができる機会を作ってもらった。

①授業に模擬利用者として協力してもらう。

日本の生活について教えてもらったり、コミュニケーションの相手になってもらった。

②スタートアップ実習

無断転載・複製を禁じます。

本格的な実習の前に、1 日だけ先生と一緒に実習に行って、利用者とのコミュニケーションを試みた。

③音楽による交流会

地域で生活されている高齢者やデイサービスの利用者の方と一緒に音楽による交流会を行った。

④授業に施設の実習指導者にきてもらう。

実習日誌の書き方やカンファレンスの練習にサポートをしてもらった。

《4．取り組みの結果》

実習やアルバイトではない学校で、実際にコミュニケーションの練習ができることは、コミュニケーション能力が少しあがったと思う。具体的には、閉じられた質問は返答がわかりやすく、コミュニケーションがとりやすかったが、開かれた質問の練習ができた。私たちは、座ったままでのコミュニケーションは、利用者の行動がわからないので、何をしたいのか言葉だけで理解しなければならず難しいが、その練習にもなった。

交流会などを通して、日本の歌など文化を知ることができ、実際に利用者とかかわるときに知ったことがトピックになり、コミュニケーションの時に役立った。

《5．考察、まとめ》

利用者のことを理解するために、利用者の生活を大切にするためには、利用者の文化や価値観、習慣を知らなければ、コミュニケーションがとれないと考える。そのためには、今回授業で学んだ内容を通して、コミュニケーションができるようにならなければならない。いろいろな日本人の方と交流できる機会があることによって、日本の生活や文化を知ることができるし、トピックを増やすことで、コミュニケーションの幅を広げることができると考える。

《6．倫理的配慮に関する事項》

本研究(実践)発表を行うにあたり、関係者に口頭にて説明を行った。本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明した。

《7．参考文献》

「コミュニケーション技術」（2022）実教出版

「新人介護職のための教科書 上巻」(2020) QOL サービス

《8．提案と発信》

私たち留学生は、日本の文化に関心はありましたが、日本の高齢者の昔の話など教えてもらえる機会は少ない。地域で生活されている高齢者の方々と積極的に交流できる機会があって、昔のことを教えてもらえること、文化を知ることは、私たちにとっても嬉しいし、トピックができ、コミュニケーションをとりやすくなると考える。

無断転載・複製を禁じます。